12世紀後半の造像技法にみる構造の改変及びその目的について

一山形県本山慈恩寺釈迦如来坐像・普賢菩薩騎象像・文殊菩薩騎獅像の模刻制作を通して―

李 品誼(東京藝術大学大学院)

1. 研究概要

中国からもたらされた『法華経』信仰は、貴族社会に浸透し院政期に最盛期を迎え、釈迦三尊像や普賢菩薩像が数多く造立された¹。このような流行が及んだ12世紀後半の制作の可能性が考えられる山形県本山慈恩寺釈迦如来坐像及諸尊像(以下、慈恩寺諸像と略称)は、『法華経』所依の彫刻群であるとみられ、釈迦如来坐像[図1]に普賢菩薩騎象像[図2]及び文殊菩薩騎獅像[図3](以下は、釈迦三尊像、または釈迦像・普賢像・文殊像と略記。ただし、必要に応じて所蔵者名を加える)、さらにその眷属が付属するという構成は、日本における彫像としてはきわめて珍しい群像である²。

近年、東京国立博物館において「平成30年新指定国宝·重要文化財展」が開催された際、CTスキャン調査³が行われたことによって、一部目視では判断し難い構造が明らかとなったが、それらは造像工程における形状や構造の変更や改変の可能性が考えられた。

よって本研究では、先行研究に最新の調査結果を付け加えて整理し、これまで様々な論考に取り上げられてきた慈恩寺諸像のうち釈迦三尊像を模刻対象とし、造像工程及び技法における問題点を明らかにし、その理由と意義について考察することを目的とした。

なお模刻制作にあたっては、精度の高い科学的な計測方法である 3D スキャニング、熟覧調査、X 線透過撮影及びCTスキャンにより得られた構造情報に基づき、原寸大で模刻制作を行った。また、これまでの数々の研究成果から得られた情報と知見をもとに、可能な限り原本像に近い材料と技法で模刻制作を行い、像の構造がどのような制作工程を経て、現在の構造に至ったのかを検証した。

また、慈恩寺諸像は欠損・亡失部が多く、当初の造形にややそぐわない後補部が見受けられる。このことから、模刻制作に際しては、同時代の類例を参考にし、比較検討しながら可能な限り造形の想定復元を試みた。

¹ 水野敬三郎監修『日本仏像史』美術出版社、2001年。

² 釈迦如来像の脇侍像として、普賢菩薩像及び文殊菩薩像を配置する釈迦三尊像が一般的である。慈恩寺所蔵の釈迦如来及諸尊像の普賢菩薩騎象像及び文殊菩薩騎獅像は、さらに眷属像の十羅刹女像(5 軀は亡失、1 軀は山形県慈光明院所蔵)、優填王像、仏陀波利三蔵像、最勝老人像(善財童子は亡失)が付属している。こうした形式は、彫刻の作例としては極めて少ない。

³ 東京国立博物館により CT スキャン調査が行なわれた。調査対象は釈迦如来坐像・普賢菩薩像・文殊菩薩像のみ、獣座及び眷属は含まれていない。本研究に際し、釈迦像・普賢像・文殊像の CT データの使用許可をいただいた。



[図1] 本山慈恩寺 釈迦如来坐像 12世紀後半



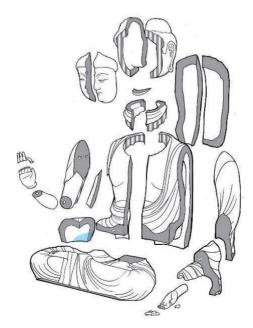
[図 2] 本山慈恩寺 普賢菩薩騎象像 12 世紀後半



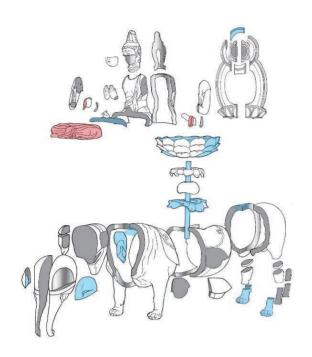
[図 3] 本山慈恩寺 文殊菩薩騎獅像 12 世紀後半

2. 慈恩寺釈迦三尊像の構造について

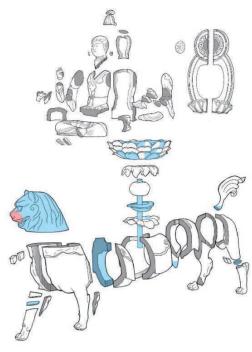
本研究における調査報告では、釈迦三尊像の像底や矧ぎ面に直線の陰刻線が確認された。3D データを用いた検証によって、釈迦三尊像に確認された陰刻線は、制作における正中などの基準を示すものであることが判明した。さらに、釈迦三尊像の側面のアウトラインも一致していることから、制作工程における共通する設計図の存在が推測された。



[図 4] 本山慈恩寺 釈迦如来像 構造図解 (灰色は矧ぎ面、網掛けは割矧ぎ、青色は美術院新補)



[図5] 本山慈恩寺 普賢菩薩騎象像 構造図解 (灰色は矧ぎ面、網掛けは割矧ぎ、赤色は後補、青色は美術院新補)



[図 6] 本山慈恩寺 文殊菩薩騎獅像 構造図解 (灰色は矧ぎ面、網掛けは割矧ぎ、赤色は後補、青色は美術院新補)

3. 慈恩寺釈迦三尊像にみられる改変

以上の点を踏まえ、実際の模刻制作を通して制作工程及び構造改変の目的を検証した。

(1) 慈恩寺釈迦像本体の構造改変

慈恩寺釈迦像は頭部別材で、首にマチ材が挟まれていることが、透過 X 線撮影によって判明した。 頭部は当初のものと判断され、制作途中で新たに造り直されたと考えられる。釈迦像の頭部は別材で 造り直されたにもかかわらず、頭部の輪郭線が両脇侍像と一致していることは、同様の図面を再び使 用して造られたことが推測される。

(2) 慈恩寺普賢像本体・慈恩寺文殊像本体の構造改変

検証によって、慈恩寺普賢像は、もともと文殊像と同様な姿勢であったものが、制作の途中段階で姿勢を前傾させたと推定した。これまでの両脇侍像の造像における改変を総合的に見れば、慈恩寺両脇侍像は共通の図面を用いて同時進行で制作し、意図的に両脇侍像を異なる姿勢とすることで、それぞれの性格の違いをあらわそうとしていることが考えられる。そして、像の性格の違いを造形であらわす工夫をしながらも、側面からのアウトラインを合わせるような調整がなされており、三尊像としての統一性を図ったのでないかと思われる。

(3) 獣座の構造改変について

本体と同様に、獣座である獅子と象においても改変の痕跡が多く確認された。

透過 X 線写真によると、獅子の右前肢及び左後肢にはマチ材が挟まれており、象の両後肢にマチ 材及び多数の小材が矧ぎ寄せられている。マチ材が四肢の一部に施されていたのは、制作途中でその 肢の動きや長さを体軀の動きと連動させて改変するためではないかと考えられる。

(4) マチ材・ヘギ木と木屎漆の使用

文殊像の両鰭袖口部と獅子胸部や両前肢の付根などの部位に多数の不規則なマチ材・ヘギ木、木屎 漆の使用がみられ、制作中に幾度も造形の改変が重ねられたことが想像される。

このように、慈恩寺釈迦三尊像にみられる試行錯誤とも言える様々な造形改変は、当初の計画を土台にしつつ、かつ制約されながらも、途中段階での鋸挽きやマチ材と木屎漆の使用など臨機応変な制作態度で、まだ計画されていなかった、新しい造形表現を造り出そうとした可能性が高いのではないかと考えられる。

4. 想定復元

現在の慈恩寺釈迦三尊像は、欠損・亡失部が多く、また当初の造形にややそぐわない後補部が見受けられるため、周辺作例を参考しながら仔細に検討し、想定復元を行った「図7~9]。

【復元した箇所】

釈迦如来坐像 : 裳先、左裾先。台座。光背。

普賢菩薩騎象像:普賢像の両脚部。華盤一部。象の牙・歯・爪、尾。光背の一部。

文殊菩薩騎獅像:文殊像の右手指、左手、耳朶一部、両鰭袖口一部、右足指先。華盤の一部。獅子の頭部、 鬣、尾先、後肢毛、蹴爪、爪先。

5. 普賢菩薩騎象像・文殊菩薩騎獅像の造形的特徴

(1) 普賢像と文殊像の姿勢

慈恩寺像と時代を前後すると思われる、礚襠衣を着る文殊像⁴との比較では、特に共通する姿勢の特徴を見いだせない。その一方、慈恩寺普賢像の姿勢を前傾させた改変は、すでに平安時代後期には定型化されていた、独尊としての普賢像に由来するものであったと思われる。しかし、その他の釈迦三尊像の両脇侍像と比較した結果、普賢像が必ず顔を俯かせる姿勢であらわされるという傾向はみられない。

以上のことから、慈恩寺普賢像および文殊像は、脇侍像として、異なる性格をもつということをより積極的にあらわすため、姿勢の違いを途中で取り入れられたものではないかと考えられる。これは、文殊像のみが 襠襠衣を着ているという服制の違いに加え、脇侍間の性格の違いをよりはっきりと対比させたいという、強い意図のあらわれであると言えるであろう。

(2) 象と獅子の動勢

象と獅子における形状改変は、動勢をより強く表現するためのものであることが推察された。さらに、獅子の胸部や両前肢の付け根など、所々に確認できた多数のヘギ木や木屎漆は、もともと細身で軽快な体部を想定され彫り進められた状態から、ボリューム感のある筋肉質な姿に変えるため、意図的に肉付きを補ったものと推測した。

⁴ 慈恩寺文殊像と時代が近い3例、岩手県大長寿院文殊菩薩像、奈良県安倍文殊院文殊菩薩像及び宮城県新宮寺文殊菩薩像を挙げ、 側面からの姿勢を図版資料で比較した。

その他の周辺作例と比較すると、慈恩寺両像の象と獅子にみられる、改変によって動きのある写 実性を増した造形表現は、平安時代前期の向源寺象(普賢菩薩台座)・獅子(文殊菩薩台座)を想起 させる。平安時代前期にみられる実在感のある古典作品を学習した可能性が高いのではないかと考 えられる。

6. 総括

慈恩寺釈迦三尊像にみられる技法的特徴としては、途中段階の鋸引きやマチ材と木屎漆での修整が挙げられる。これらは大幅な造形改変に柔軟に対応できる技法とも考えられるが、その反面、修整や改変による造形の不整合や、漆の変色による制作過程においての造形把握の視覚的阻害など作業性のデメリットもあるため、作者としての立場からすると、極力避けたい行為でもある。

これらの改変は、おそらく当初に計画されていなかった造形が求められ、一度完成された形を土台にしつつ、やむを得ずに修整が行われたゆえに施した工作だと考えられる。特に文殊像と獅子にみられる度重なる修整によって加えられた多数のヘギ木と木屎漆の使用からは、木彫にというカービングの技法にとらわれない作者の姿勢がうかがわれる。その一方、釈迦像の頭部においては木屎漆などを使用せずに大胆に切断して別材へと取り換えるなどの手法を選択していることから、造形の修整に臨機応変な、熟練した技術を有する作者であったことが想像できる。また、これらの改変をどのような立場の人物が主導したかは明らかではないが、その手法からは作者の積極的な意図を垣間見ることができる。

よって筆者は、これらの改変は、伝統的な造形や唐風の古典作品からの学習など、多様な要素を受容し随所にちりばめて表現するために、制作の途中段階で、造形修整・統一感の調整・姿勢や動勢の強調を試みた痕跡であると推論した。



[図7] 本山慈恩寺 釈迦如来坐像 想定復元模刻 令和2年(2020)



[図8] 本山慈恩寺 普賢菩薩騎象像 想定復元模刻 令和2年(2020)



[図 9] 本山慈恩寺 文殊菩薩騎獅像 想定復元模刻 令和 2 年 (2020)

図版の出典

[図1・2・3]伊東史朗『日本の美術 458 平安時代後期の彫刻 信仰と美の調和』至文堂、2004 年。

主要参考文献

『山形県史資料編14・慈恩寺史料』山形県、1974年。

松浦正昭「寒河江・慈恩寺の法華彫像(上)」『仏教美術 132 号 特集法華経の美術』毎日新聞社、1980 年。 『山形県文化財調査報告書第 24 集 本山慈恩寺の仏像』山形県教育委員会、1983 年。 麻木脩平「慈恩寺平安仏の制作年代について」『東北地方彫刻の基礎的調査研究』東北大学、1988 年。